

# 大学生の不登校に関する研究の動向

堀井 俊章

## Non-attendance of University Students : An Overview of Research

Toshiaki HORII

### I. はじめに

大学生の不登校というテーマは、平成12年度の当時文部省（現文部科学省）による答申「大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりをめざして—」（文部省高等教育局，2000）、および平成19年度の日本学生支援機構による報告書「大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—」（日本学生支援機構，2007）の中で取り上げられ、今日、不登校の大学生を理解し対応を図ることの意義や必要性が指摘されている。

従来、大学生の不登校という現象は、スチューデント・アパシー、ひきこもり、意欲減退、モラトリアム、留年・休退学などの概念に包含・吸収された形で説明される傾向にあった。特に、ひきこもりという視点を中心に論じられる傾向は現在も続き、記憶に新しいところでは、宮西（2011）による著書「ひきこもりと大学生—和歌山大学ひきこもり回復支援プログラムの実践」、松本（2007）による著書「大学生のひきこもり—人間性心理学的アプローチによる援助」等によって論じられている。しかし、小柳（1994，1996）は不登校について他の概念に包含するのではなく、不登校そのものに枠組みを与え、不登校を「①三カ月以上登校していない。②身体的な病気あるいは重篤な精神的な病気がない。③家庭にも大学にも登校を妨げる理由がない。」と定義した上で実態調査を行っている。その研究が端緒となり、近年、「不登校」という用語・概念に基づき、大学生の不登校問題についてアプローチする動きが認められるようになってきた。

本稿は大学生の不登校に関する従来の文献を通観・整理することを目的とする。ただし、不登校がスチューデント・アパシー、ひきこもり等に包含・吸収された文献ではなく、直接、題目・本文に「不登校」という用語を使用し、不登校という概念に基づき論じた文献に焦点を当てる（題目・本文に「不登校」と記載されていても、本文がスチューデント・アパシー、ひきこもり等に限定した内容であれば対象としない。反対に題目・本文に「スチューデント・アパシー」「ひきこもり」等と記載されていても、本文で不登校という概念に基づき論じた文献であれば対象とする）。また、文献を整理するにあたり、大きく「不登校の大学生数」「不登校のタイプ・背景要因」「不登校の事例・対応」という3つのカテゴリーを設けた。

大学生の不登校というテーマに関心を持ち理解を深めたいと考える者にとって、また、新たに大学生の不登校に関する研究および支援に着手・展開したいと考える者にとって、本稿が有益な情報提供となることを目指したい。

### II. 不登校の大学生数

不登校の大学生数に関する文献リストを表1に示した。

#### 1. 全学生の中の不登校学生数

不登校の大学生数に関する実態調査は、従来、個々の大学において実施されてきた。小柳（1994）によ

表1 不登校の大学生数に関する文献リスト

| 著者名    | 発行年   | 題目  | 雑誌名または発行所  | 巻(号) | 頁       |
|--------|-------|---|--|------|---------|
| 小柳晴生   | 1992  | 不登校を伴う来談学生の追跡的研究  | 第29回全国大学保健管理研究集会報告書  | —    | 289-292 |
| 小柳晴生   | 1994  | 休学者および出席不良学生のスクリーニングおよび相談システムの研究                          | 1993年度香川大学教育研究特別経費研究報告書  | —    | —       |
| 安保英勇ら  | 2001  | 東北大学における学生の不登校・不適應  | 東北大学学生相談所紀要  | 27   | 1-9     |
| 鶴田和美ら  | 2002  | 名古屋大学における不登校の現状と対応  | 名古屋大学学生相談総合センター紀要  | 2    | 2-15    |
| 高石恭子ら  | 2002  | 学生相談から見たひきこもりと不本意就学の現状                                    | 甲南大学学生相談室紀要  | 9    | 16-28   |
| 津田 均ら  | 2005  | 社会から、大学から「ひきこもる」学生に対する援助の可能性                              | 名古屋大学学生相談総合センター紀要  | 5    | 3-14    |
| 高石恭子   | 2006  | ひきこもりと不本意就学の学生相談室利用者に占める比率の変化—2004年度の資料から                 | 甲南大学学生相談室紀要  | 13   | 15-27   |
| 磯部典子ら  | 2006a | 学生相談から見た不登校の現状  | 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集   | 22   | 91-98   |
| 吉村麻奈美ら | 2008  | 学生相談における不登校に関する実態調査—東京大学学生相談所における不登校学生のデモグラフィック変数と状態像を中心に | 東京大学学生相談所紀要  | 17   | 25-32   |
| 水田一郎ら  | 2009  | 大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究                        | 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究平成20年度 総括・分担研究報告書 | —    | 79-101  |
| 水田一郎ら  | 2010b | 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と支援に関する研究                          | 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究平成19～21年度 総合研究報告書 | —    | 53-55   |
| 毛利真紀   | 2011  | カウンセリング利用学生を通して見る不登校・長期欠席の現状—本学の現状を知る端的試みとして              | 東京工業大学保健管理センター年報   | 38   | 75-86   |

注) 発行年順 (表2・表3と重複する文献も含まれる)

ると、香川大学では在籍学生数に占める不登校学生数の割合は0.9% (調査用紙の回収率等を考慮した推計値は1.2～2.0%) であり、男子が女子の2倍である。安保ら (2001) によると、東北大学では1.13% (学年ごとのデータでは0.28～1.47%) であり、学年別では4年生が最も多い。鶴田ら (2002) によると、名古屋大学では0.12～3.87% (学部ごとのデータ) であり、学部別では工学部が最も多く、学年別では4年生が最も多く、男子が女子より多い (津田ら (2005) は同大学の3年後の資料を報告している)。最近では全国規模の調査 (水田ら, 2009, 2010b) も行われ、不登校の大学生数は0.7～2.9% (全国の大学生約280万人中2.0～8.1万人) と推定されている。それぞれの研究によって不登校の定義に多少の違いは見られるが、不登校の大学生は今日相当数に上ることが示唆される。

## 2. 来談者の中の不登校学生数

学生相談機関に来談した学生数に占める不登校学生数の割合については、香川大学では13.1%（小柳，1992）、名古屋大学では17.6%（学生相談総合センター学生相談部門）（鶴田ら，2002）、広島大学では17.2%（磯部ら，2006a）、東京大学では16.9%（吉村ら，2008）、東京工業大学では28.6%（毛利，2011）と報告されている。なお、他にも、高石（2006）と高石ら（2002）は主に「ひきこもり」という用語を使いながら不登校・ひきこもりの学生数に関する調査を行っている。

## Ⅲ. 不登校のタイプ・背景要因

大学生における不登校のタイプ・背景要因に関する文献リストを表2に示した。

### 1. 小柳晴生の報告

小柳（1996）によると、不登校のタイプは「対人恐怖を伴う不登校」と「抑うつを伴う不登校」に大別され、後者はさらに「疲弊型」「逃避型」「アパシー型」に分類されている。「対人恐怖を伴う不登校」は「視線、容貌などのおかしさのために他人に嫌われていると感じ、集団場面で緊張が生じて登校が困難になるもの」を意味する。「抑うつを伴う不登校」の「疲弊型」は、「抑うつを典型的タイプで、几帳面、完全主義などのために、あらゆることを怠りなくこなそうとして心身ともに疲れ果てて不登校になるもの」をさし、「逃避型」は「プライドが高いわりには現実対処能力の少ない人が、うまくやりおおせそうもない場面で、一種のやけや投げだし反応として抑うつ症状を示すもの」を意味する。「アパシー型」は「性格的にプライドが高く、現実対処能力の少ない人が、うまくやりおおせなくて面目を失するような場面が予想される時、早々と避けてしまうことから生じる」と述べている。「アパシー型」は「疲弊型」に一見類似するが、「アパシー型」は「現実には不適応が生じているが、こころの痛みを感じないという特徴」を示し、「逃避していることさえ意識しないようにしている」と述べている。小柳は上記以外に「女子学生における過食や拒食などの摂食障害を伴うもの」「身体の不調が前面に出るもの」「大学のランクにこだわり何度も再受験するという理由で不登校をするタイプ」といった類型も挙げている。

また、小柳（2001）は「不登校の心模様」として、不登校の心性について「「目標の真空地帯」を漂う苦しみ—あいまいさを嫌う強迫心性」「友だちができない、自分だけが浮いている—対人恐怖」「気分が沈んで何もしたくない—抑うつ」「社会に出るのを延ばしたい—モラトリアム」という4項に分けて説明している。

小柳は上記のような分類を試みているが、基本的な捉え方としては、「不登校は一見不適応に見えるが、その本質は外的適応を一時的に犠牲にして、内的適応をはかるという重要な作業に取り組んでいる時期と考えられ、この意味で健康な営みと言える」（小柳，1996）と指摘し、不登校は不適応、病的なものではなく、「生き方の変更」の時間であると捉えている（小柳，2001）。

### 2. その他の報告

高塚（2000）は、大学生の不登校に至る要因を心理的な面から次の5つに分類している。すなわち「アパシー型」「対人恐怖型」「登校拒否型」「学校脱落群型」「その他の型」である（高塚（1999）では「アパシー型」「対人恐怖型」「登校拒否型」「学校脱落型」の4分類である）。「登校拒否型」は「自己の有する体験過程や価値観、行動様式に対する自尊意識が高く、それを批判したり否定される場面に出ると、主体性が脅かされるという不安が生じるため、そうした場面に出ることを拒否するタイプ」であり、「サークル、ゼミ、コンパなどを避ける者が多い。無気力であるという感じは少ない」と説明している。「学校脱落群型」は「大学なり学部に所属することへの動機づけが弱いため、入学しても学業に対する関心や興味が湧いてこず、次第に足が遠のいていくタイプ」としている。

田中（2000）は、不登校について、「不登校に至った課題内容」と「背景にある心的状態」という二つ

表2 大学生における不登校のタイプ・背景要因に関する文献リスト

| 著者名      | 発行年   | 題目   | 雑誌名または発行所                | 巻(号)  | 頁       |
|----------|-------|--|--------------------------|-------|---------|
| 小柳晴生     | 1996  | 大学生の不登校—生き方の変更の場として大学を利用する学生たち(注:小柳晴生(1999)「心理臨床セミナーシリーズ④学生相談の「経験知」—大学における心理臨床」垣内出版等に同様の記述所収)                          | こころの科学                   | 69    | 33-38   |
| 高塚雄介     | 1999  | 大学生における不登校に関する考察—不登校社会の延長線上における歪み  | 第21回全国大学メンタルヘルス研究会報告書    | —     | 74-75   |
| 高塚雄介     | 2000  | 大学生の不登校の心理的要因についての考察   | 早稲田大学学生相談センター報告書         | 31    | 33-42   |
| 田中健夫     | 2000  | 大学生にとっての不登校(小林哲郎他編著「大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド」(第9章))(注:橋本鉦市(編)(2010)「リーディングス 日本の高等教育3 大学生 キャンパスの生態史」玉川大学出版部に同文所収) | ミネルヴァ書房                  | —     | 141-160 |
| 文部省高等教育局 | 2000  | 大学における学生生活の充実方策について(報告)—学生の立場に立った大学づくりをめざして  | 文部省高等教育局                 | —     | —       |
| 小柳晴生     | 2001  | 不登校学生の心模様—「生き方の変更」に挑戦する学生たち(鶴田和美編「学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ」(16章))   | 培風館                      | —     | 182-195 |
| 牧野幸志     | 2001  | 大学生の不登校に関する基礎的研究(1)—大学生の不登校と退学希望の理由の探索   | 高松大学紀要                   | 36    | 79-91   |
| 鶴田和美ら    | 2002  | 名古屋大学における不登校の現状と対応   | 名古屋大学学生相談総合センター紀要        | 2     | 2-15    |
| 鈴木康之ら    | 2004  | 不登校大学生の心理社会的特性   | 総合保健科学:広島大学保健管理センター研究論文集 | 20    | 43-50   |
| 堀井俊章     | 2006  | 大学生における不登校傾向の実態調査  | 山形大学保健管理センター—紀要          | 5     | 62-67   |
| 松原達哉ら    | 2006  | 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因  | 立正大学心理学研究所紀要             | 4     | 1-12    |
| 磯部典子     | 2006a | 学生相談から見た不登校の現状   | 総合保健科学:広島大学保健管理センター研究論文集 | 22    | 91-98   |
| 磯部典子ら    | 2006b | 卒業年次の不登校学生への支援   | CAMPUS HEALTH            | 43(2) | 95-100  |
| 津田 均ら    | 2008  | 名古屋大学不登校学生の特徴と経過—4年間のカルテが語る実態  | 名古屋大学学生相談総合センター紀要        | 8     | 3-10    |
| 井崎ゆみ子ら   | 2009  | 大学生の不登校にみられた精神医学的問題  | CAMPUS HEALTH            | 46(1) | 332-333 |
| 荒井佐和子ら   | 2011  | 不登校大学生に対する大学教員の視点と支援   | 広島大学心理学研究                | 11    | 339-347 |
| 蔵本信比古    | 2011  | 大学生の不登校と単位取得との関連   | 北海道情報大学紀要                | 23(1) | 37-44   |
| 竹中美香     | 2012  | 不登校学生の発見の手がかりと対応に関する考察—クラス担任として教学を支援した実践例からの検討   | 学生相談研究                   | 33    | 49-59   |

注) 発行年順(表1・表3と重複する文献も含まれる)

の側面から捉えようとしている。「不登校に至った課題内容」は「大学での対人関係における葛藤」「自分の生き方を見つめなおす必然性」「乗り遅れ感・つまずき体験」「その他」に分類されている。竹中(2012)は複数の事例を通して見えてきた不登校学生の特徴として「対人関係の未熟さや自尊感情の低さ」「不本

意入学」「保護者の無関心あるいは過剰期待」「学業不振」の4点を挙げている。井崎ら（2009）は不登校大学生について精神医学的立場から調査分析した結果、「うつ病圏」が特に多いことを明らかにしている。

鈴木ら（2004）は調査研究によって不登校大学生の心理社会的特性（生活史上のエピソード、大学生活に関わる諸項目、心理特性等）について報告している。磯部ら（2006a）も調査研究から、不登校の契機、留年・休学の有無、自殺関連因子等との関係について報告し、それとほぼ同様な観点から、磯部ら（2006b）は卒業年次の不登校学生の特徴について報告している。津田ら（2008）はカルテ調査の結果から不登校学生のカテゴリを行っている。荒井ら（2011）は大学教員を対象とした調査を実施し、教員から見た不登校大学生は「アパシー群」「心理的問題群」「不明群」の3タイプに分類され、各群に対する教員の支援方法は異なることを報告している。蔵本（2011）は不登校と単位取得との関係について細かく分析している。

文部省高等教育局（2000）によると、「大学生の不登校の原因としては、思春期を受験勉強に費やし、人との関わりを持たなかったことによる対人関係失調や、何事もきちんとしなければ気が済まないという強迫的性格、さらに青年期の長期化などが指摘されている」とある。なお、「不登校傾向」という観点から背景要因について調査分析したものとしては、牧野（2001）、堀井（2006）、松原ら（2006）等が挙げられる。

#### IV. 不登校の事例・対応

大学生における不登校の事例・対応に関する文献リストを表3に示した。

##### 1. 個別事例

簡潔に不登校の個別事例を取り上げたものとして、小柳（1996）は対人恐怖的な男子学生の不登校事例を紹介している。高塚（2002）はアパシー状態にある学生、人間関係が煩わしくて嫌だと感じる学生、自己愛の強い学生の3事例を取り上げ考察している。安保ら（2001）は大学の教育体制への不満から登校を拒否した事例と対人不安を背景にした不登校事例を紹介している。鶴田ら（2002）は「休学という形の不登校で自分を整理した学生」「パッシブ・アグレッションとしての不登校例」「家庭内での虐待の連鎖がもたらした不登校例」等の事例を取り上げている。磯部ら（2006b）は卒業年次の不登校事例として、「院試失敗を契機に不登校が始まり、学生への接近が困難だったケース」「対人恐怖症で卒論ゼミに出席できず、不登校を呈したケース」「孤立感から不登校に陥り、卒業年次に自殺の危機が高まったケース」「人間関係のトラブルから研究室に登校できなくなったケース」の4事例を紹介している。太田（2004）は「論文執筆中に不登校状態になった」学生の事例を簡潔に紹介している。吉村ら（2008）は不登校8事例の概要を説明している。

やや詳しく個別事例を扱ったものとして、田中（2000）は大学入学後間もなく授業に出なくなった学生の事例を挙げながら不登校の意味について考察している。山本（2005）は不登校事例を通して学生時代における「失敗」の意味について論考している。

高橋（1996）は不登校学生の2事例を紹介し、アイデンティティ拡散という視点から考察している。森岡ら（2009）は発達の偏りを背景とした不登校学生の3事例について検討し、「自閉症スペクトラム障害」という視点からみることの重要性を指摘している。平野（2009）は睡眠相後退症候群、季節性感情障害（冬季うつ病）等の2事例を紹介し、時間生物学（体内時計）の視点から考察している。

竹中（2012）はクラス担任としてかかわった不登校学生の5事例について報告している。不登校学生の予兆や発見の手がかりとして、7つの学生の特徴、すなわち「入学初期の遅刻や欠席」「保健室を探す」「生活リズムの乱れ」「アルバイトへの没頭」「約束が守れない」「進路変更を訴える」「欠席過多」について指摘している。また、対応上の工夫として「初期対応」「保護者との協力」「教職員との連携」「居場所作り」「連絡を取り続ける」「自分を見つめ直す時間として尊重する」「実現可能な目標の設定」「高等学校との連携」「精神疾患の可能性の把握」の9点を挙げ、考察している。

表3 大学生における不登校の事例・対応に関する文献リスト

| 著者名      | 発行年   | 題目   | 雑誌名または発行所  | 巻(号)   | 頁       |
|----------|-------|--|--|--------|---------|
| 高橋俊彦     | 1996  | 大学生とアイデンティティー無気力で「不登校」の学生について  | 学校保健研究   | 38 (3) | 230-235 |
| 小柳晴生     | 1996  | 大学生の不登校—生き方の変更の場として大学を利用する学生たち(注:小柳晴生(1999)「心理臨床セミナー」シリーズ④「学生相談の「経験知」—大学における心理臨床」垣内出版等に同様の記述所収)                      | こころの科学   | 69     | 33-38   |
| 田中健夫     | 2000  | 大学生にとっての不登校(小林哲郎他編著「大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド」(第9章))(注:橋本鉦市(編)(2010)「リーディングス 日本の高等教育3 大学生 キャンパスの生態史」玉川出版部に同文所収) | ミネルヴァ書房  | —      | 141-160 |
| 文部省高等教育局 | 2000  | 大学における学生生活の充実方策について(報告)—学生の立場に立った大学づくりをめざして  | 文部省高等教育局   | —      | —       |
| 安保英勇ら    | 2001  | 東北大学における学生の不登校・不適応   | 東北大学学生相談所紀要  | 27     | 1-9     |
| 小柳晴生     | 2001  | 不登校学生の心模様—「生き方の変更」に挑戦する学生たち(鶴田和美(編)「学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ」(16章))   | 培風館  | —      | 182-195 |
| 高塚雄介     | 2002  | 大学生の不登校(高塚雄介「ひきこもる心理とこもる心理—自立社会の落とし穴」(第3章))  | 学陽書房   | —      | 75-106  |
| 鶴田和美ら    | 2002  | 名古屋大学における不登校の現状と対応   | 名古屋大学学生相談総合センター紀要  | 2      | 2-15    |
| 永野勇二     | 2003  | 大学生S子の不登校事例  | 松山東雲女子大学人文学部紀要   | 11     | 81-92   |
| 太田裕一     | 2004  | 学生の危機への対応—教職員への立場から  | 大学と学生  | 5      | 25-33   |
| 山本大介     | 2005  | 学生時代における失敗の意味—ある不登校学生の事例   | 島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要   | 2      | 37-43   |
| 関川紘司     | 2005  | ある不登校学生の母親面接—学生の再登校・そして就職活動  | 学生相談研究   | 25     | 179-189 |
| 磯部典子ら    | 2006b | 卒業年次の不登校学生への支援   | CAMPUS HEALTH  | 43 (2) | 95-100  |
| 最上澄枝ら    | 2008  | 自ら助けを求めず潜在している学生に対する学内協働による取り組み—欠席過多学生対応プロジェクトを通して   | 学生相談研究   | 28     | 214-224 |
| 吉村麻奈美ら   | 2008  | 学生相談における不登校に関する実態調査—東京大学学生相談所における不登校学生のデモグラフィック変数と状態像を中心に  | 東京大学学生相談所紀要  | 17     | 25-32   |
| 日本学生支援機構 | 2008  | 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」  | 日本学生支援機構   | —      | —       |
| 森岡洋史ら    | 2009  | 大学における不登校問題について—卒業論文でつまずいた3症例から  | 精神科  | 15 (6) | 578-585 |
| 平野 均     | 2009  | 時間生物学からみた「不登校・ひきこもり」問題   | 大学と学生  | 68     | 46-55   |
| 藤田長太郎ら   | 2009  | 不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援—キャンパスソーシャルワーカーとの協働による学生の自己選択能力の形成支援  | 大学と学生  | 69     | 43-51   |
| 市来真彦     | 2010  | 大学全体で取り組む学生支援における学生相談室の役割  | 大学と学生  | 84     | 36-43   |
| 水田一郎ら    | 2010a | 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と援助に関する研究   | 厚生労働科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成21年度 総括・分担研究報告書 | —      | 103-117 |
| 水田一郎ら    | 2011  | 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から   | 学生相談研究   | 32     | 23-35   |
| 荒井佐和子ら   | 2011  | 不登校大学生に対する大学教員の視点と支援   | 広島大学心理学研究  | 11     | 339-347 |
| 榎本真理子    | 2011  | 大学に通う気になれない—不登校・引きこもりの学生の支援(東京大学大学院理学系研究科・理学部学生支援室・下山晴彦(編)「東大理学部発学生相談・学生支援の新しいかたち—大学コミュニティで支える学生生活」(第1章))            | 岩崎学術出版社  | —      | 17-30   |
| 藤田長太郎    | 2011  | メンタルヘルスケアによる中途退学防止—不登校がちな学生へのアウトリーチ型支援を実施して  | 大学マネジメント   | 7 (8)  | 13-17   |
| 富永ちはる    | 2011  | ひきこもり・不登校となった学生の復学援助—閉ざした心を再び開かせたチーム援助   | 大学と学生  | 89     | 32-40   |
| 竹中美香     | 2012  | 不登校学生の発見の手がかりと対応に関する考察—クラス担任として教学を支援した実践例からの検討   | 学生相談研究   | 33     | 49-59   |
| 野本ひさら    | 2012  | 「こころの健康」の出席点検及び電話連絡による不登校予防の取り組み   | 大学教育実践ジャーナル(愛媛大学)  | 10     | 77-80   |

注) 発行年順(表1・表2と重複する文献も含まれる)

個別事例の面接経過について詳しく取り上げたものとして、永野（2003）は不登校の女子学生との21回にわたる面接経過について報告している。関川（2005）は大学2年生から4年間ほとんど授業に出席しなかった男子学生の事例を取り上げ、母親面接および学生面接の経過を説明しながら、不登校事例における母親面接の意義について考察している。他にも各大学の学生相談機関から発行された機関誌に、不登校に関する個別事例の面接経過について詳しく報告されている文献がいくつか見られたが、それらについては割愛する。

## 2. チーム支援・全学的支援体制

チーム支援・全学的支援体制という観点から不登校への対応について紹介・考察された文献も見られる。富永（2011）はカウンセラーを中心としたチーム援助により不登校学生を復学に導いた事例を紹介している。榎本（2011）は「学科との連携により来談につながった学部生のケース」と「指導教員との連携を活用した大学院生のケース」を紹介し、「教職員の知見と相談員の専門性とを融合させたチームアプローチによるサポートが有効である」と指摘している。野本ら（2012）はチームを組みながら特定の必修科目の出席点検および電話連絡を行い、新入生の不登校予防を実践している。

全学的な支援体制をベースにした実践例として、大分大学では不登校傾向の大学生が休学や退学に結びつくケースがあることを踏まえ、出席不良・成績不振学生を対象にアウトリーチ型の支援を展開している（藤田，2011；藤田ら，2009）。神奈川大学においても、退学者を防止する対策として、欠席率25%を超える「欠席過多学生」を対象に学内協働による支援を試みている（市来，2010；最上ら，2008）。

不登校問題への対応に関する調査研究として、荒井ら（2011）は大学教員を対象とした質問紙調査によって不登校学生に対する大学教員の支援法について分析している。水田ら（2010a, 2011）は全国の学生相談機関を対象とした調査分析から多様な支援の実態について報告している。

## 3. 文部省・日本学生支援機構の報告

文部省高等教育局（2000）の報告では次のように記述されている。「不登校については、これまで否定的に捉えられてきたが、学生が「自分をつくりかえるための時間」または「自分とつきあうための時間」として費やしていると考えられることもできる。不登校学生のうち、学生相談機関に相談に来る学生は卒業にこぎつける割合が高いという報告もあり、各大学においては、学生のプライバシーに十分配慮しつつ、コンピュータ等を利用して、学生の単位の取得状況など修学状況をチェックすることにより不登校学生を把握した上で、不登校学生に対するきめ細かな相談・援助を行っていくことが求められる。また、各大学において、大学に出ていけないが勉強したいという不登校学生のために、放送大学や、英検等の技能審査やTOEFL等の学外での学修を活用した柔軟な単位認定の仕組みの導入のほか、弾力的な休学制度の運用や、復学の際の適切な援助の方法について検討することが望まれる」。

また、日本学生支援機構（2007）の報告では、「学業不振・不登校学生への支援」について、「学業への意欲を喪失したり、不登校状態に陥った学生に対する支援方策が、多くの大学で課題となっている。このような学生が、教職員に対して自ら支援を訴えることは稀であり、学生のニーズは教職員に汲み取られることによって初めて顕在化する。かつては、このような学生への相談・援助活動は自主的に相談に訪れる学生に対してのみ行われていたが、近年では早期に積極的なアプローチをとる大学も増加している」と述べている。

さらに同報告では、「学生支援の3階層モデル」の立場から次のように指摘している。「日常的学生支援（第1層）」としては、「教職員は、単位取得状況の思わしくない学生、授業やゼミに出席しない学生、あるいは休・退学をしようとする学生などに注意を払い、早期に個別の対応に結びつける姿勢を持つことが望まれる。また、学生間のネットワーク不足が不適應を助長することが多いため、大学は、クラス活動やサー

クル活動の活性化、友だちづくりの機会や学生の居場所の提供、教職員との日常的交流の活性化等の方策をとることが重要である」。次に、「制度化された学生支援（第2層）」では、「学業不振・不登校学生に対し、学生の自主性を尊重しつつ、クラス担任や指導教員また教務担当の事務系職員から、学期や年次ごとの面談や保護者への連絡等の取組を行う意義は大きい。また、学業への復帰の援助にあたっては、補習の提供が有用な場合もある」。次に「専門的學生支援（第3層）」では、「心理的な問題がうかがえる場合には学生相談機関のカウンセラー等に紹介し、連携・協働していくことが望まれる。長期に渡る引きこもりの場合には、保護者、教員、カウンセラー間で継続的に連絡を取り合い、学生の状況に合わせた支援を行うことが重要である」と指摘している。

## V. おわりに

本稿では大学生の不登校に関する従来の文献を概観してきた。近年徐々に進展しつつあるものの、この分野の研究はまだまだ発展途上の段階にあり、調査研究・事例研究・実践研究等のいずれにおいても不十分である。今後、幅広く実りある研究の蓄積が期待される。なお、本稿では重要な文献は可能な限り網羅したが、筆者の触れていない文献があればご教示願いたい。

## 文 献

- 安保英勇・吉武清實・菊池武剋 2001 東北大学における学生の不登校・不適応．東北大学学生相談所紀要，**27**, 1-9.
- 荒井佐和子・石田 弓・大塚泰正・岡本祐子・児玉憲一 2011 不登校大学生に対する大学教員の視点と支援．広島大学心理学研究，**11**, 339-347.
- 榎本真理子 2011 大学に通う気になれない—不登校・引きこもりの学生の支援．東京大学大学院理学系研究科・理学部学生支援室・下山晴彦（編）東大理学部発学生相談・学生支援の新しいかたち—大学コミュニティで支える学生生活．岩崎学術出版社，pp.17-30.
- 藤田長太郎 2011 メンタルヘルスケアによる中途退学防止—不登校がちな学生へのアウトリーチ型支援を実施して．大学マネジメント，**7(8)**, 13-17.
- 藤田長太郎・嘉目克彦・漆間幸一・河野美奈 2009 不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援—キャンパスソーシャルワーカーとの協働による学生の自己選択能力の形成支援．大学と学生，**69**, 43-51.
- 橋本鉦市（編）2010 リーディングス日本の高等教育3 大学生 キャンパスの生態史．玉川大学出版部．
- 平野 均 2009 時間生物学からみた「不登校・ひきこもり」問題．大学と学生，**68**, 46-55.
- 堀井俊章 2006 大学生における不登校傾向の実態調査．山形大学保健管理センター紀要，**5**, 62-67.
- 市来真彦 2010 大学全体で取り組む学生支援における学生相談室の役割．大学と学生，**84**, 36-43.
- 磯部典子・内野悌司・鈴木康之・藤巴正和・岡本百合・林マサ子・土井 由・黒崎充勇・品川由佳・酒井祥子 2006a 学生相談から見た不登校の現状．総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，**22**, 91-98.
- 磯部典子・内野悌司・岡本百合・黒崎充勇・品川由佳・酒井祥子 2006b 卒業年次の不登校学生への支援．*CAMPUS HEALTH*, **43(2)**, 95-100.
- 井崎ゆみ子・武久美奈子・西尾よしみ・石原容子・早淵純子・横山小百合・佐藤八重子・前田健一 2009 大学生の不登校にみられた精神医学的問題．*CAMPUS HEALTH*, **46(1)**, 332-333.
- 蔵本信比古 2011 大学生の不登校と単位取得との関連．北海道情報大学紀要，**23(1)**, 37-44.
- 牧野幸志 2001 大学生の不登校に関する基礎的研究 (1)—大学生の不登校と退学希望の理由の探索．高松大学紀要，**36**, 79-91.
- 松原達哉・宮崎圭子・三宅拓郎 2006 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因．



- 立正大学心理学研究所紀要, 4, 1-12.
- 松本 剛 2007 大学生のひきこもり—人間性心理学的アプローチによる援助. ナカニシヤ出版.
- 宮西照夫 2011 ひきこもりと大学生—和歌山大学ひきこもり回復支援プログラムの実践. 学苑社.
- 水田一郎・石谷真一・安住伸子 2011 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から. 学生相談研究, 32, 23-35.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 2009 大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらず精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成 20 年度 総括・分担研究報告書, 79-101.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 2010a 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらず精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成 21 年度 総括・分担研究報告書, 103-117.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 2010b 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と援助に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらず精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成 19～21 年度 総合研究報告書, 53-55.
- 最上澄枝・金子糸子・佐藤哲康・布施晶子・市来真彦 2008 自ら助けを求めず潜在している学生に対する校内協働による取り組み—欠席過多学生対応プロジェクトを通して. 学生相談研究, 28, 214-224.
- 文部省高等教育局 2000 大学における学生生活の充実方策について(報告)—学生の立場に立った大学づくりを目指して.
- 森岡洋史・赤崎安昭・川床貴史・児玉 圭・堀切 靖・佐野 輝 2009 大学における不登校問題について—卒業論文でつまづいた 3 症例から. 精神科, 15(6), 578-585.
- 毛利真紀 2011 カウンセリング利用学生を通して見る不登校・長期欠席の現状. 東京工業大学保健管理センター年報, 38, 75-86.
- 永野勇二 2003 大学生 S 子の不登校事例. 松山東雲女子大学人文学部紀要, 11, 81-92.
- 日本学生支援機構 2007 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」.
- 野本ひさ・玉井洋明・井戸 興・上西喜晴・川尻美菜・安井万理・萩森真由美・栗林照子・岡本厚美・田中優子 2012 「こころの健康」の出席点検及び電話連絡による不登校予防の取り組み. 大学教育実践ジャーナル(愛媛大学), 10, 77-80.
- 太田裕一 2004 学生の危機への対応—教職員への立場から. 大学と学生, 5, 25-33.
- 小柳晴生 1992 不登校を伴う来談学生の追跡的研究. 第 29 回全国大学保健管理研究集会報告書, 289-292.
- 小柳晴生 1994 休学者および出席不良学生のスクリーニングおよび相談システムの研究. 1993 年度香川大学教育研究特別経費研究報告書.
- 小柳晴生 1996 大学生の不登校—生き方の変更の場として大学を利用する学生たち. こころの科学, 69, 33-38.
- 小柳晴生 1999 「心理臨床セミナー」シリーズ④ 学生相談の「経験知」—大学における心理臨床. 垣内出版.
- 小柳晴生 2001 不登校学生の心模様—「生き方の変更」に挑戦する学生たち. 鶴田和美(編) 学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ. 培風館, pp.182-195.

- 関川紘司 2005 ある不登校学生の母親面接—学生の再登校・そして就職活動. 学生相談研究, 25, 179-189.
- 鈴木康之・磯辺典子・内野悌司・藤巴正和 2004 不登校大学生の心理社会的特性. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 20, 43-50.
- 高橋俊彦 1996 大学生とアイデンティティー無気力で「不登校」の学生について. 学校保健研究, 38, 230-235.
- 高石恭子 2002 学生相談から見たひきこもりと不本意就学の現状. 甲南大学学生相談室紀要, 9, 16-28.
- 高石恭子 2006 ひきこもりと不本意就学の学生相談室利用者に占める比率の変化—2004年度の資料から. 甲南大学学生相談室紀要, 13, 15-27.
- 高塚雄介 1999 大学生における不登校に関する考察—不登校社会の延長線上における歪み. 早稲田大学学生相談センター報告書, 31, 33-42.
- 高塚雄介 2000 大学生の不登校の心理的要因についての考察. 第21回全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 74-75.
- 高塚雄介 2002 ひきこもる心理とじこもる心理—自立社会の落とし穴. 学陽書房.
- 竹中美香 2012 不登校学生の発見の手がかりと対応に関する考察—クラス担任として教学を支援した実践例からの検討. 学生相談研究, 33, 49-59.
- 田中健夫 2000 大学生にとっての不登校. 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編著) 大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド. ミネルヴァ書房, 141-160.
- 津田 均・古橋忠晃・鶴田和美・杉村和美・田中伸明・加藤大樹・桂田祐介・船津静代・神村静恵・小川豊昭・鈴木國文 2008 名古屋大学不登校学生の特徴と経過—4年間のカルテが語る実態. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 8, 3-10.
- 津田 均・諏訪真美・古橋忠晃・鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・加藤容子・船津静代・田中宣秀・鈴木國文 2005 社会から、大学から「ひきこもる」学生に対する援助の可能性. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 5, 3-14.
- 富永ちはる 2011 ひきこもり・不登校となった学生の復学援助—閉ざした心を再び開かせたチーム援助. 大学と学生, 89, 32-40.
- 鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・山口智子・赤堀薫子・船津静代・鈴木國文 2002 名古屋大学における不登校の現状と対応. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 2, 2-15.
- 山本大介 2005 学生時代における失敗の意味—ある不登校学生の事例. 島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要, 2, 37-43.
- 吉村麻奈美・中島正雄・今泉すわ子 2008 学生相談における不登校に関する実態調査—東京大学学生相談所における不登校学生のデモグラフィック変数と状態像を中心に. 東京大学学生相談所紀要, 17, 25-32.